儚く消える声に冬の白を知る

杏野丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚く消える声に冬の白を知る

【Ｎコード】

Ｎ０１７６Ｏ

【作者名】

杏野丞

【あらすじ】

兄が消えた。冬の足音を感じる街角で、彼女は今日も戻らないものを探す――――短編。

――知りません、ただ隣の人だったってだけですから、話した事もありません。悪いけど用事あるんですよ、こっちも。もう来ないで下さいよ、本当。

インターホンが途切れるブツッと言う音で、会話は強制終了された。

今日はドアを開けても貰えなかった。けれど仕方ないかも知れない、と彼女は思う。唐突なこの来訪は三回目なのだ。

はた迷惑なガキだと思われているのだろうか。それとも最近流行りの“ゆとり”ってヤツに間違えられているのか。それはちょっと嫌だな。

とりとめのない考えはひとつ吹いた木枯らしに霧散する。

セーラー服の首筋を吹き抜けたのは、驚くほど冷めた風だった。

鈴原舞子は首をすくめて、小さなため息を吐いた。肺の奥底に絡み付いた黒い不安は、息を吐くという行為だけで消せるものではない。それでもため息は尽きなかった。

ニヶ月以上、彼女は毎日何かあるたび、ため息を吐いている。

近頃ではその息も白く染まるようになってきた。冬が来たのだ。

人より少し赤みがかった長い髪を、夕暮れの風がなぶる。

彼は――この寒さの中、暖かな場所にいるんだろうか。それとも。

それを思うと心細さがじわりじわりと背中に這い上がってくる。

お下がりのダッフルコートの前を掻き合わせ、マフラーをし忘れた首を庇うようにして、舞子は古びたアパートを後にした。

鈴原舞子の兄が姿を消したとはっきり断定されたのは、まだ寒さの欠片もない九月の半ばの事だ。
あれからもうニヶ月。季節は確実に冬へと傾いている。

早く家に帰りたいわけではないが、歩む足取りは早かった。
日に日に沈む時を早める太陽は道を隠そうとする悪意にも思われて、酷く泣きたい気分になるのだ。
舞子は夕暮れの帰り道が嫌いだった。

角を曲がった先にある馴染みのバス停にはもう街灯が点されている。日除けもない、錆び付いたベンチがポツンあるだけのバス停。
兄が居なくなる前から、彼女がこのバス停たどり着くたび抱く思いは変わらない。
『今日が終わらなければいいのに』
それだけだ。

それだけの彼女の願いが、叶う日は永遠にこない。

工業地帯に隣接する寂れた古い木造アパートの群れ。その一角で独り暮らしをしながら自動車工場勤務をしていた舞子の兄は、穏やかな人だった。
母親が夜の仕事に出るまで顔を合わせないよう逃げてくる妹のために、鍵はいつも郵便受けの裏側に。すきま風の吹くハリボテのような造りの部屋も、舞子にとっては安心して過ごす事のできる唯一の聖域だ。

定時から三時間の残業を終えて帰ってくる兄のためにささやかな夕食を作って待つ時も、舞子は寂しくなかった。家族を待つ、穏や

かに満たされた心の温かさ。冷めた夕食だって二人で食べれば楽しい。
彼女の母親は、娘がある程度の料理をこなせる事を知らないだろう。舞子自身もまた、母親の作る食事など食べた思い出は殆んどない。

小学校の遠足のお弁当を作ったのも、中学校の体育祭のお弁当を作ったのも、兄だった。
夜遅くから朝方まで帰らず、昼は死んだように眠ったままの母親の変わりに七つ違いの妹の世話をし、生活に必要な事を教えたのは彼だった。

――油揚げは湯通しするんだ。そうするとお味噌汁が油っこくならないからね。
――制服は干す時叩くと良いよ。ほら、皺が落ちるから。アイロン掛けなくて良いから楽だろ。
――学校終わったらお兄ちゃんの所においで。お母さん、今が辛い時だから。落ち着いて話せるようになったら、お母さんにご飯、作ってあげなよ。ね。

兄は舞子の世界の軸だった。

そんな彼が消えた日は、いつもと変わらない、ただ普通の九月の金曜日。学校から真っ直ぐアパートに訪れた舞子は、郵便受けの裏側に鍵がない事に気付いた。部屋の鍵は勿論掛かっていたから、彼女はドアの前で兄を待った。
知らなかったのだ。それが別れの印だったと言う事など。

彼はその日、工場を解雇されていた。アパートの少ない荷物は殆んどそのままで、携帯電話も流しに置いたままになっていた。いつ

も二人で囲んでいたちゃぶ台に舞子宛の一万円が入った封筒が置いてあった。
たったそれだけを残して、彼は忽然と、舞子の前から姿を消したのだ。
手紙の類いはなかったから足取りも全く掴む事が出来ず、いたずらに月日だけが過ぎていった。

瞳の上を流星のように流れる家々の明かりが速度を落とす。バスが停まったのだ。けたたましいブザーと共にドアが開くと、なだれ込む夜風が車内にこもったぬるい空気を払い去る。風から顔を背けるようにして、舞子はバスを降りた。

ありがとうございました、と機械的に流した運転手のアナウンスは乾いた疲労が滲んでいる。
舞子も疲れていた。剥き出しの頬は冷たく強張っている。今日はもう、夕食を作る気力もない。

バス停には見馴れた制服の部活生と思しき男子達がたむろしていた。笑い合う彼らは寒さを感じていないかのような制服のままで、その姿が少し羨ましい。
自分にも男のような力があれば、夜だって構わずに探して歩く事ができるのに。強い男だったら兄を支えられたかも知れないのに。
うつむいて脇を通り過ぎながら彼女は唇を噛み締める。

「……なあ、あれ鈴原じゃね？」

後ろから微かに聞こえた声に、瞬間、思考が凍り付く。

「ホントだ」

「うそお、何やってんのよこんな時間まで」
「え、何って、ナニじゃね？」
「は？」
「え、知らない？　鈴原ってホラ、あの……」
「うわ、アレがあの鈴原？　間違いじゃねえ？　清楚系ぽかったけど」
「俺一年の時クラス一緒だったから知ってるわ。あれ絶対鈴原。そういやあんときからあるぜ、あのウワサ」
「まあ、帰宅部がこんな時間まで制服で一人……ってなあ。しかも知ってるか？　今来たバスって工業団地からのヤツだぜ。おっさんしか住んでない」
「家そっちなんじゃね？」
「違うよ、アイツ母子家庭だもん。友達とかも全然いないし」
「えー！？　じゃあ本当なのかよ鈴原援交説！」
「バカかっお前声でかい！」

ケタケタと無遠慮な笑い声が続く。

――丸聞こえなのよ、馬鹿共のクセに。下らない。
そう思いながらもダッフルコートを掴む舞子の手には力が入っていた。

歩調を変えない事だけが彼女のできる精一杯の虚勢だったから、背筋を伸ばして舞子は歩いた。
何も後ろめたい事なんてない。それなのに心が傷付くのは馬鹿馬鹿しい。
それでもズキズキと痛む胸が真実だ。

涙の無意味さを舞子は知っていたから泣きはしなかった。ただいつもと同じように唇を噛み締めていた。泣くのはいつも母親の役割

だ。

兄が消えて、久しぶりに母親と二人で過ごした夜。黒く渦巻く心のままにポツリと洩らした、

『お母さんがもっと、お兄ちゃんに行かないでって言ってくれたら良かったのに』

と言う言葉に、母親は泣いた。泣きながらしたたかに舞子を殴った。

――アタシじゃないでしょう、それを言わなきゃいけなかったのは、アンタでしょう！

大体、アンタが居たのに、どうして広明が居なくなるの！

繋ぎ止めておきなさいよ、家族だったんでしょう、アンタ達は！

お母さんじゃ無理なんだから、アンタが繋ぎ止めておきなさいよ！

どうしてどこにも行かないでって言わなかったの！

なんで言っておかなかったの！

言いなさいよ！

アンタ気持ちを出さなすぎなのよ！

何が欲しいか分かんないのよ！

何が好きなのかも分かんないのよ！

でも広明は好きだったんでしょう？

だったら居てって言えば良かったじゃないの！

お兄ちゃんお家を出て働くよって言った日に、行かないでって泣けば良かったのよ！

……言えば良かったじゃないの、アンタが！

母親はひたすらワアワアと泣きわめき続けた。
酔っていない彼女からは、雨の日のような湿った悲しい匂いがしていて、舞子は彼女にやり返す事ができなかった。泣き疲れた母親は、子供のように舞子の胸にしがみついて眠った。

十七歳の冬の始まり。
静かに崩れていく何かがある事、崩れた中から拾い上げる事のできる何かを、舞子は噛みしめている。

母親はまだ夜の仕事を続けているが、舞子が新聞配達を終えた後、一緒に朝食を取るようになった。
夜は独りだ。無為に過ぎる時間を埋めるために舞子は別のアルバイトを始めようと思っている。
僅かな足しにしかならないかもしれないが、厳しい生活費と――兄を探す交通費のあてを増やすため。

雲を掴むような現状が変わらない事にもう怒りすら感じない。磨滅していく感情の底辺に残るのは、茫然とした喪失感だ。

「……お兄ちゃん……」

白い呟きを風が運び去る。応答はもちろんない。彼女の冷たい頬を嘲笑うかのように、高い空で木枯らしが鳴く。
兄がいたあの聖域はもう、どこにもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0176o/

儚く消える声に冬の白を知る

2011年10月3日18時40分発行